

## 事態認識と言語形式のかかわりについて

—付帯状況表現「～ナガラ」を題材に—

A Note on Cognition and Language Form-NAGARA, A Conjunctive Form in Japanese

池田 英喜\*

(iked@isc.niigata-u.ac.jp)

---

In this work, I make 2 hypotheses;

- 1) Sentences are divided into some hierarchical categories.
- 2) 2 sentences conjuncted by *NAGARA* must be semantically independent.

The above two hypotheses are also evident when putting two words of the same category in a parallel connection.

---

### 1. はじめに

(01) テレビを見ながら、勉強した。

(02) テレビを見て、勉強した。

上記2例はともに付帯状況表現を伴った文である。2文いずれも「勉強する」という主となる事態と同時進行的に「テレビを見る」という付随的事態が起こっていることをあらわしている。しかしながら、日本語母語話者がこの例に接すると、(01)で見るテレビは、勉強と無関係の番組であると解釈しやすいのに対して、(02)で見るテレビは、勉強という目的のために見るものであって、その画面で放映されている内容と勉強には密接な関係があると解釈しやすい。本稿では、特にこの前者であるナガラを伴った付帯状況表現を取り上げ、主たる事態と付随的事態にはどのような意味的關係が存在するかを考察する。

### 2. 先行研究

付帯状況表現のナガラ、タママ、テの3者を比較し、それぞれの特徴をまとめたものに三宅(1995)があるが、その中のナガラについての結論の記述を以下に紹介する。

ナガラ…「過程」を持つ動詞の場合、付帯状況として成立する。ただしその場合、主節に対する相対的な「過程」であってもよい。「過程」を持たない動詞の場合は、基本的に不成立であるが、繰り返しの意味の場合、または「維持」を持つ動詞の場合は、成立することがある。これらは「過程的な持続性を持つ場合に成立する」としてまとめることができる。尚、動詞が「維持」

---

\*新潟大学国際センター 助教授

を持つ場合は、タママ、テに置き換えが可能な場合がある。

つまりは、付帯状況表現となるべく従属節の動詞に過程もしくは過程と見なし得るようなある種の時間的持続の意味が見出せるか否かが成立の鍵となっている。しかしながら、時間的持続性にはなんら問題がなくとも、ナガラの使用が許されない、もしくは許しがたい表現は簡単に作り出すことができる。

次節ではそのような例を紹介し、事態の認識とそれを表す言語形式のかかわりについての仮説を紹介する。

### 3. ナガラが使える場合と使えない場合

以下に示すような例の場合にはナガラは使えない、あるいは非常に使いにくい。たとえば(03)の例が許されるのは、「卵と小麦粉を混ぜる」のが「ケーキを焼く」のではなく「クッキーを焼く」など、ケーキとはまったく別のものを作るための行為である場合であろう。

しかし、前述の三宅(1995)の指摘するような過程的持続の有無についてはまったく問題のないものばかりである。

(03) ?卵と小麦粉を混ぜながら、ケーキを焼く。

(04) ?クレヨンで色を塗りながら、絵を描く。

(05) ?石鹸で体を洗いながら、お風呂に入る。

一方で、前述の3例と同じ動詞を用いて事態を表しながら、全く問題なくナガラを用いることのできる以下のような例がある。

(06) パスタとソースを混ぜながら、ケーキを焼く。

(07) 口紅を塗りながら、絵を描く。

(08) 石鹸で靴を洗いながら、お風呂に入る。

それぞれ異なるのは、(03)と(06)では何を混ぜるのか、(04)と(07)では何を塗るのか、(05)と(08)では何を洗うのかだけであるが、この違いによってわれわれの事態の認識には大きな差が生じると考えられる。すなわち(03)から(05)の場合には、以下のような事態の認識の仕方が働いていると考えられ、その場合にはナガラで両者を接続することはできないという言語的事実がある。

(09) 卵と小麦粉を混ぜるのは、ケーキを焼くための一作業工程である。結局これらは1つの事態である。

(10) クレヨンで色を塗るのは、絵を描くための一作業工程である。結局これらは1つの事態である。

(11) 石鹸で体を洗うのは、お風呂に入るための一作業工程である。結局これらは1つの事態である。

それに対して、(06) から (08) では主節の表す事態と、とナガラ節の表す事態に意味的なつながりは何もないと考えられ、その結果2つの事態を全く別々に認識していると考えられる。

(12) パスタとソースを混ぜることと、ケーキを焼くことは全く無関係な2つの事態である。

(13) 口紅を塗ることと、絵を描くことは全く無関係な2つの事態である。

(14) 石鹸で靴を洗うことと、お風呂に入ることは全く無関係な2つの事態である。

(03) から (05) の事態の出現順を逆にしてみると、面白いことにそれほど違和感なく文意の解釈が可能になり、容認しやすい文になる。以下は (03) から (05) の例文内の事態の出現順を逆にしたものである。

(15) ケーキを焼きながら、卵と小麦粉を混ぜる。

(16) 絵を描きながら、クレヨンで色を塗る。

(17) お風呂に入りながら、石鹸で体を洗う。

たとえば (15) では、(09) のように言語形式上では2つの事態を、結局は1つの事態として認識するという機能が働かず、「ケーキを焼く」という事態と、「卵と小麦粉を混ぜる」という事態は、お互い無関係な2つの事態であるという認識が優先されている。(15) (16) についても同様である。

以上のことから、以下のような2つの仮説を導き出すことができる。

仮説①：事態には上位、下位の区別が存在する。

仮説②：ナガラによって接続される2つの事態は、その解釈において全く無関係な独立したものでなければならず、お互い上位下位の関係にある2つの事態を接続することはできない。

(03) と (15) で表される事態だけを単純に取り上げれば、「ケーキを焼く = 上位事態」「卵と小麦粉を混ぜる = 下位事態」となり、仮説②の条件から (03) は不可となる。一方同じ2つの事態を取り上げていても、(15) では上位事態をナガラ節に用いた結果、2つの事態の上位/下位という関係がキャンセルされ、それぞれ無関係な別の事態として認識されるというわけである。

実際の言語感覚においても、(03) の文を読んだ/聞いた場合には (09) のように解釈してしまい、その結果ナガラによる接続に違和感を覚えるが、(15) の文を読んだ/聞いた場合には、一方でケーキを焼き、その傍らで、それこそクッキーを作る準備として卵と小麦粉を混ぜるといったような印象を受け、ナガラによる接続にそれほど違和感を覚えない。

## 4. ナガラ文の実例検証

以下に実際にナガラ節が付帯状況表現として用いられている用例をあげる。

- (18) こうして周りからの圧力と戦いながら、がん細胞は分裂を重ねていく。(AERA93年5月25日号)
- (19) 暑さばかりは、どうにもならないけど、片手でうちわをあおぎながら寝る特技が見についた。(AERA93年5月25日号)
- (20) 愛想のないお手伝いの老女が運んできた紅茶に砂糖を入れながら、宇多山はそろりと切り出した。(『迷路館の殺人』綾辻行人 講談社)
- (21) 煙草の箱を上着のポケットに戻しながら、鮫嶋は答えた。(『迷路館の殺人』綾辻行人 講談社)
- (22) トットちゃんは、いいことを思いついて、ママの顔をのぞきながら、大声をはりあげていった。(『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹子 講談社)
- (23) 放課後、トットちゃんのクラスの子は、みんな、弾丸のように、家に帰ってしまった。お互いに、パジャマと毛布を持って集まれる幸運を祈りながら…。(『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹子 講談社)

(18) から (23) で示されるそれぞれ2つの事態を並べて表にしてみると以下のようになる。

	事態① (ナガラの前)	事態② (文末)
(18)	圧力と戦う	分裂を重ねる
(19)	うちわをあおぐ	寝る
(20)	紅茶に砂糖を入れる	(話を) そろりと切り出す
(21)	煙草の箱を上着のポケットに戻す	(質問に) 答える
(22)	ママの顔をのぞく	大声をはりあげていう
(23)	幸運を祈る	家に帰る

通常の付帯状況表現としてのナガラ節と主節の表す2つの事態には、上位下位の関係も存在しないし、意味的に何ら関係のない事柄が現れていることは明らかである。

## 5. 他の言語現象とのかかわり

付帯状況表現というのは、いわば同時に存在する2つの事態を並列的に、しかしその両者をそれぞれ独立の文としてではなく、接続して全体として1つの文として表現するという手法である。このことは2つの名詞を並列的に1つの文に組み込んで表現する手法と似ている。

たとえば、名詞／形容詞を並列的に表現した場合は、

- (24) リンゴとみかんが好きだ。(=「リンゴが好きだ」+「みかんが好きだ」)  
(25) 桜の花はかわいくて艶やかだ。(=「桜の花はかわいい」+「桜の花は艶やかだ」)

のようになる。並列にするのが名詞／形容詞ではなく文末の動詞の場合、たとえば(18)の例を借りれば、

- (26) うちわをあおぎながら寝る。(=「うちわをあおぐ」+「寝る」)

という具合に付帯状況表現を用いることになる。

だとすれば、上位概念と下位概念を並列的に接続できないというのは付帯状況表現の「ナガラ」以外の他の言語現象にも当然見られるはずであり、たとえば以下のような言語事実が簡単に見つかる。

- (27) \*子供は犬と動物が好きだ。  
(=「子供は犬が好きだ」+「子供は動物が好きだ」)  
(28) \*空き地に新しいマンションと建物が建つ。  
(=「空き地に新しいマンションが建つ」+「空き地に新しい建物が建つ」)

(27) では動物が犬の上位概念であり、(28) では建物がマンションの上位概念であるので、これらを並列に接続することができない。

## 6. まとめ

本稿で述べた仮説を以下に再録する。

- ①：事態には上位事態、下位事態の区別が存在する。
- ②：ナガラによって接続される2つの事態は、その解釈において全く無関係な独立したものでなければならず、お互い上位下位の関係にある2つの事態を接続することはできない。

語彙分類を行う際にはごく当たり前のように考慮される上位概念／下位概念という考え方を、文についても応用できるのではないかと考えてみた。本稿では、文といわずに「文の表す事態」という捉え方をしたが、これは「われわれが一つの事柄として認識するのはなんであろうか」を考え、そのコア(核)になるところだけを抽出したかったからでる。

簡単な考察ではあったが、並列表現に関する制限が語彙的なものだけではなく文という単

位においても生きているということが示せたことは収穫である。

レポートのテーマに付帯状況表現を選んでくれた我が研究生の孫景浩君に、この場を借りて感謝します。

감사합니다.

参考文献

池田英喜 (1996) 「経験をあらわす「シタコトガアル」について」待兼山論叢第30号日本学  
篇、大阪大学文学会

寺村秀夫 (1982 a) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

寺村秀夫 (1982 b) 「付帯状況表現の成立の条件—「XヲYニ……スル」という文型をめぐ  
って—」『日本語学10-2』

三宅知宏 (1995) 「～ナガラと～タママと～テー付帯状況の表現—」『日本語類義表現の文法  
(下) 複文・連文編』くろしお出版